

師弟ノ和熟ハ育英ノ大本

〔第一話〕

夏目 漱石（金之助）



明治の文豪、夏目漱石は『吾輩は猫である』わがはい『坊ちゃん』に始まって『こゝろ』『明暗』にいたるまで、多くの名作を残していますが、作家としての活躍は、明治三十八年、三十九歳のときからで、胃潰瘍いかいようで亡くなるまで僅か十一年にすぎません。

漱石に多大な文学的・人間的影響を与えたのが俳人・正岡子規まさおかしきで、子規が手がけた漢詩や俳句などの文集『七草集』に漱石がその批評を書いたことから、本格的な友情が始まり、「漱石」という名は、子規のペンネームから譲り受けた名でもあり、漱石は俳句にも数々の佳作かざくを残しています。

漱石と並び称せられる文豪、森 鷗外おうがいが、本職は陸軍軍医であつたように、漱石も本職は学校の先生でした。帝国大学文科大学（今の東大文学部）の学生時代、東京専門学校（早稲田大学の前身）講師を務めたのを皮切りに、東京高等師範学校・松山中学校・第五高等学校、そしてイギリス留学をはさみ、第一高等学校・東大・明治大学などの先生でした。当時、帝大出の文学士といえは大したもので、「坊ちゃん」の舞台となつた四国の松山では、校長よりも漱石の給料が高かつたそうです。

漱石が熊本の第五高等学校教員となつたのは、日清戦争の勝利から間もない、明治二十九年のことです。その翌年同校は創立十周年を迎えました。漱石は教職員の総代として祝辞を述べます。その冒頭に「ソレ教育ハ建国ノ基礎ニシテ師弟ノ和熟わじゅくハ育英ノ大本たいほんタリ」という言葉があります。

この祝辞は格調高く論旨ろんし明快で、すばらしい内容なので、現在も熊本大学の構内の石碑せきひに刻み残されています。

教育は国家百年の大計と申しますが、その根本が師弟の和熟（先生と生徒が和らぎ親しむ）にあるとは、永遠に変わらぬ真理であります。そう言い切った漱石は、文豪として名を成す前に、一人の教育者としても多くの学生・生徒に慕われた人物だったのです。

※夏目 漱石（金之助）（なつめ そうせき〈きんのすけ〉・大正五年（一九一六年）没・五十歳）

◎ 漱石の祝辞「夫れ教育は建国の基礎にして、師弟の和熟は育英の大本たり」（熊本大学の石碑より）は格調の高い言葉です。

◎ 漱石は「根気ずくでお出なさい。世の中は、根気の前に頭を下げることを知っています。火花の前には一瞬の記憶しか与えてくれません」と人生訓を遺しています。

（M生）